

# 全学英语プログラムの 3 年間を振り返って

菊 池 武

## I. はじめに

2012 年度および 2013 年度に、英語教科担当の教員の協力を仰ぎ、学生を対象として、いわき明星大学における全学共通カリキュラムの英語科目アンケートを実施し、その結果を年度ごとにまとめた（菊池 2013、菊池 2014）が、今年度も同様のアンケートを実施した。その間、2013 年度に向けて、英語科目の方向性を EGAP（English for General Academic Purposes、一般学術目的のための英語）に定め、それにふさわしい教科書の選択を行い、また、担当教員の共通理解を得るために 2013 年 3 月に FD ミーティングの開催も行った。本研究の目的は、そのような改革がどのような形で学生の意識に影響を与えているのか、これまでのアンケート調査の結果を比較することにより、総括することである。その結果をもとに、本学の今後の全学共通教育の英語科目に対する考察を行う。

## II. 調査方法

本研究の対象者は、244 名のいわき明星大学において英語の全学共通科目を受講している大学生である。内訳としては、1 年生が 201 名、2 年生が 43 名となっている。実施方法については、過去 2 年間と同様、12 月の第 2 週に筆者が科目担当者に依頼する形を取った。学生に対しては、アンケートに無記名で回答するよう求めた。実施にあたっての内容・質問項目・集計方法等については、菊池（2013）にて詳細を述べているため、紙面の都合上ここでの説明は割愛する。

## III. 調査結果

### (1) 英語学習および各技能についての認識

質問項目としては、「大学時代に英語の実践的な力をつけることは、自分の将来の目標実現（留学・研究・就職・大学院進学など）にとって大切だ。」というもので始まり、大学における英語教育の必要度および技能別の認識を尋ねている。表 1 においては、2012 年度、表 2 は、2013 年度、そして表 3 は 2014 年度の結果を示す。最初の項目である大学における英語力の重要性の認識に関しては、昨年度において、特に重要性の認識を強く持つ学生の割合は一昨年度と比べて 25.9% から 31.7% へと大きな増加を示したが、今年度は 2012 年度と大きな差のない 26.5% にとどまり、年度を経るごとに増加する傾向とはならなかった。しかしながら、必要度の認識を持つ学生は昨年度、本年度とも 85% を超える割合となっており、調査を開始した年度の 82.3% と比べるとや

や高い数値となっている。その一方で、否定的な回答を示す学生の割合は、2012年度と比べるとやや少ない割合であるものの、昨年度、今年度とも15%程度存在しており、英語の重要性に対して否定的な見方を示す層が根強く存在していることを示している。技能別の結果については、昨年度特徴的であったのは、各技能とも一昨年度と比べて、重要性を強く認識する割合が高くなっていたことが挙げられるが、今年度に関しては一昨年度と同程度の割合となっている。各技能別の認識の割合は、英語学習の重要度の認識と連動する傾向があるのかもしれない。興味深いことに、3年間で重要性を強く認識する割合の順位は変わらず、1位がスピーキング、2位がリスニング、3位がリーディングそして4位がライティングというものである。話したり聞いたりする技能こそ重要であるという昨今の英語の重要性の認識を反映したとも考えることができる。この結果は、今年度についても変わることはなかった。全体としては、2012年度と比べて、2013年度および2014年度は英語の必要性の認識はやや強いととらえることができるだろう。そして、2013年度と2014年度を比べると、全体としての認識の程度では類似しているが、各技能も含めて、認識の程度にやや差が見られると考えてよいであろう。

表1 英語学習および各技能についての認識 (2012)

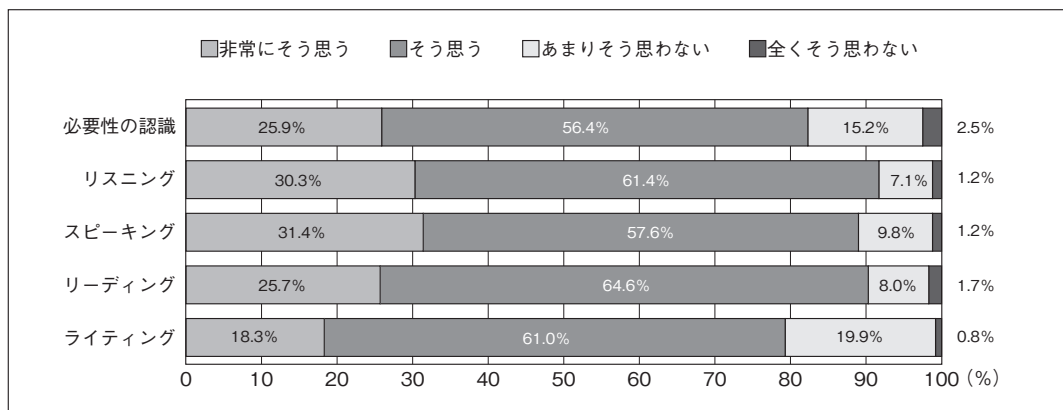


表2 英語学習および各技能についての認識 (2013)

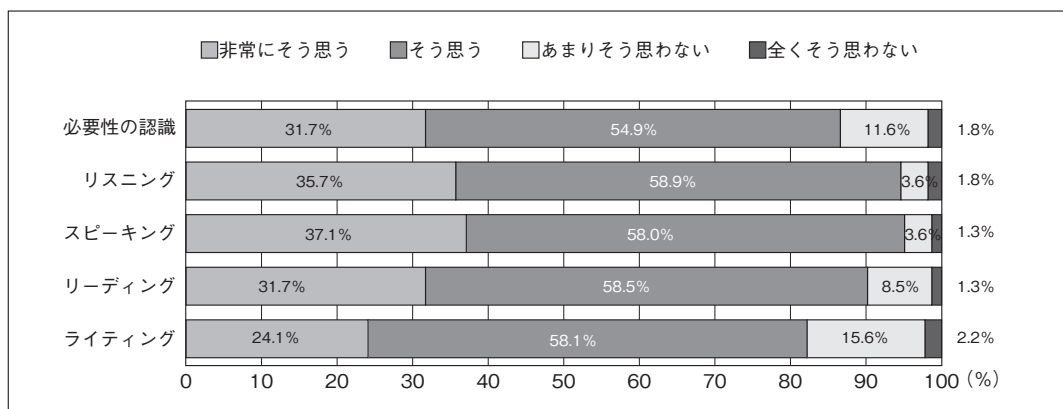
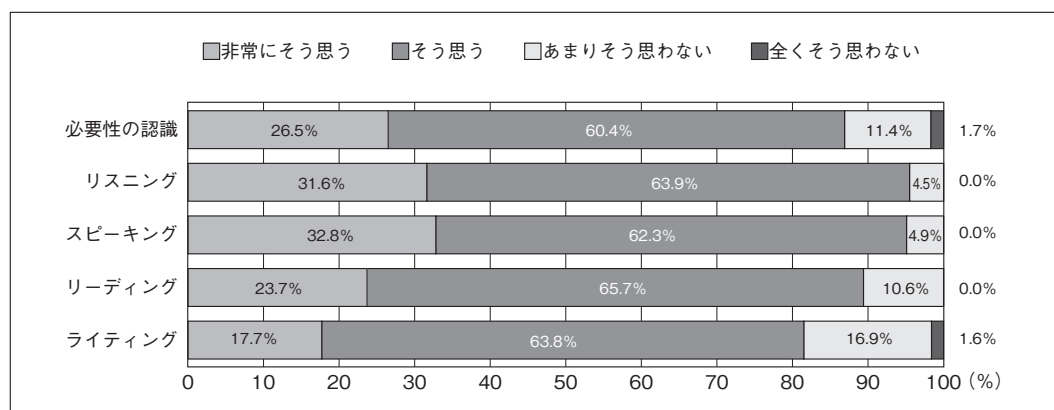


表3 英語学習および各技能についての認識（2014）



## (2) 全学英語科目全体、英語の学習環境、各技能の向上の度合いの認識

全学英語科目全体に関しての満足度、本学における英語の学習環境、各技能の大学入学後の向上の有無の認識についての各年度の質問結果をまとめたものが表4から表6である。全体的な満足度を尋ねる「これまで受けた全学共通の英語科目の授業について総合的に満足している。」という質問に対しては、2012年度は肯定的な回答が約50%で、2013年度が62.4%となり肯定的な回答の割合が増えたとみることができたが、2014年度は、59.4%となり、2012年度と比べれば高い割合であるものの、昨年度と比べやや割合が減少している。学習環境については、2012年度と比べ2013年度は肯定的な回答がやや上回る結果となっていたが、今年度はこれまでで最も低い49.6%にとどまっている。なお、4技能全般の運用能力が身についたかどうかという問いに関しては、2012年度まで4技能を総合的に向上させる教科書を使用していたため、昨年度のアンケートまでは比較の目的で質問項目に入れていたが、今年度は技能別の教科書を使用して2年目となるため質問から除外した。技能別の認識の違いについて、肯定的な回答の合計順に並べると、2012年度はリスニング能力の約44%、リーディング能力の約41%、スピーキング能力の約38%、ライティング能力の約34%と続いたが、2013年度はリスニング能力の約41%、ライティング能力の約40%、リーディング能力の約36%、そしてスピーキング能力の約31%と続き、2014年度については、ライティング能力の約40%、リーディング能力の約39%、リスニング能力の約31%、そしてスピーキング能力の約29%という結果となっている。この3年間の変化に規則性を見出すのは難しいととらえることもできるが、スピーキング能力およびリスニング能力については年度を経るごとに肯定的な回答が低下しており、原因について考察するとともに、今後とも注視すべき項目であると言えるだろう。最も変化の少ない技能はライティング能力であり、今年の結果では、最も肯定的な回答が多かったと言えるが、それでも4割程度にとどまることを認識しなければならない。今年度の結果として変化が見られる部分は、強く否定する回答を示す割合であり、2013年度までは15%から20%程度の割合を示していたのであるが、いずれの項目でも10%程度にとどまっている。

表4 全学英語科目全体、英語の学習環境、各技能の向上の度合いの認識 (2012)

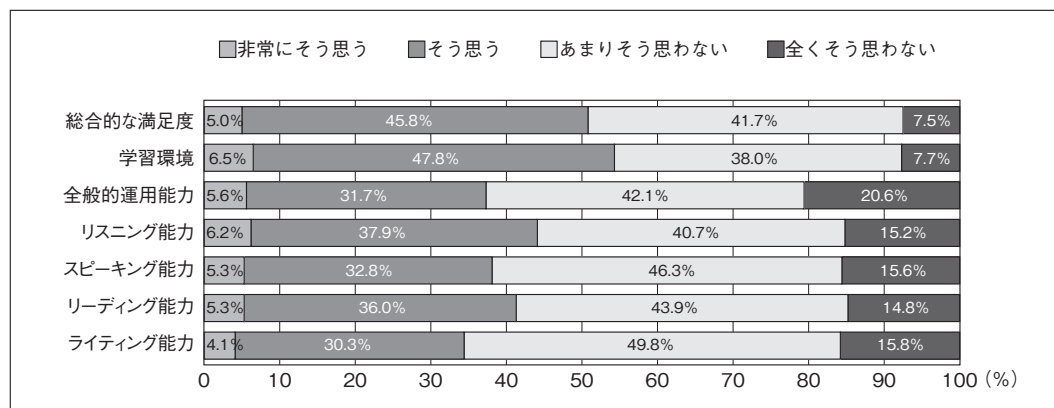


表5 全学英語科目全体、英語の学習環境、各技能の向上の度合いの認識 (2013)

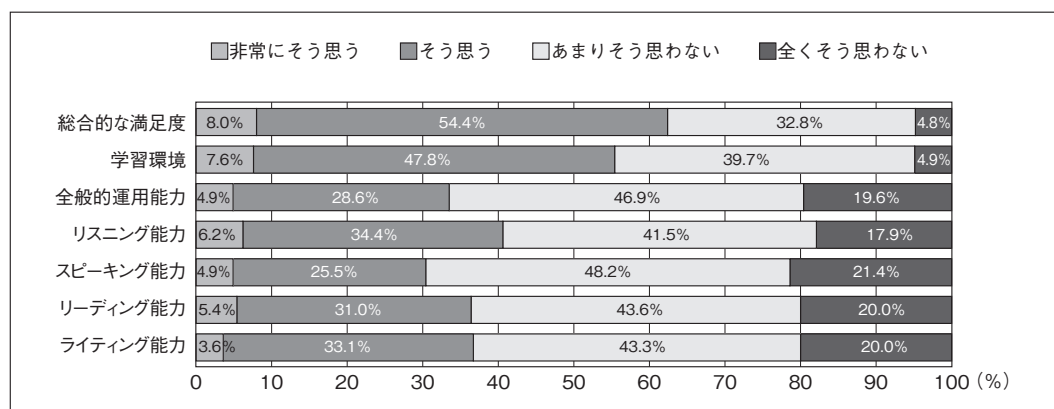
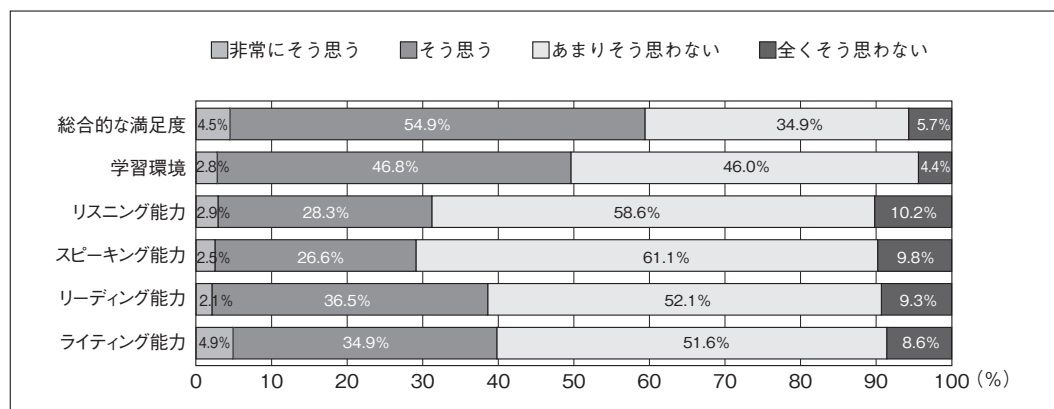


表6 全学英語科目全体、英語の学習環境、各技能の向上の度合いの認識 (2014)



### (3) 教科書の難易度に関する意見

表の7～9に英語Aの教科書の難易度についての意見をまとめたグラフを示した。英語Aについては、2012年度までは英語の4技能を向上させることを意図した教科書が使用されていたが、2013年度より一般学術目的のための英語という方向性に沿って教科書を選択し、中心とすべき技能をリーディング能力、ライティング能力に定めた。そして、2013年度には、難易度について、前年度と比べ、適切と回答した学生の割合が約10%増加し、簡単すぎると回答した学生の割合は逆に約10%減少するという結果が示された。しかしながら、今年度の結果を見ると、簡単すぎたとの回答が24%ほどあり、2012年度ほどではないものの、再び簡単すぎるという反応が目立つようになった。これについては、担当教員の一人と話をすることがあり、特に習熟度別で上位のクラスの学生にとっては、もう1つレベルを上げてても十分対応可能であろうとの意見をいただいた。このことも踏まえ、来年度から教科書のレベルを習熟度別クラスごとにこれまでより上げる予定である。その一方で、難しすぎるとする学生の割合も3年間を通して11%程度存在することを看過してはならないであろう。

表10から12は英語Bの教科書に対する意見を年度別にまとめている。英語Bについては、2012年度においてもリスニング能力とスピーキング能力を中心的な技能とした教科書を使用していたが、2013年度より技能としては同様なものの、内容的に一般学術目的の英語に沿ったものを選択した。2013年度の結果では、簡単すぎたとの回答をした学生の割合が、2012年度と比べて約7%増加し、適切であると回答した学生の割合が約7%減少した。そして今年度の結果では、同じ教科書を使用したにもかかわらず、簡単すぎた

表7 英語A（2012）

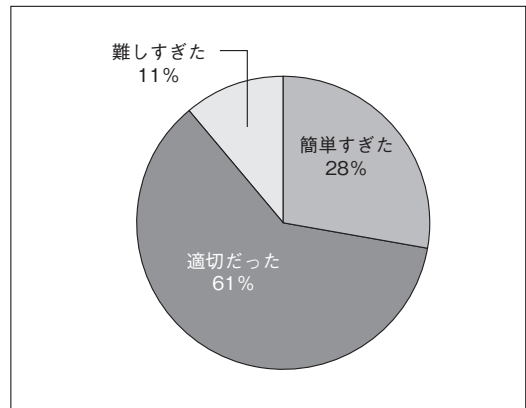


表8 英語A（2013）

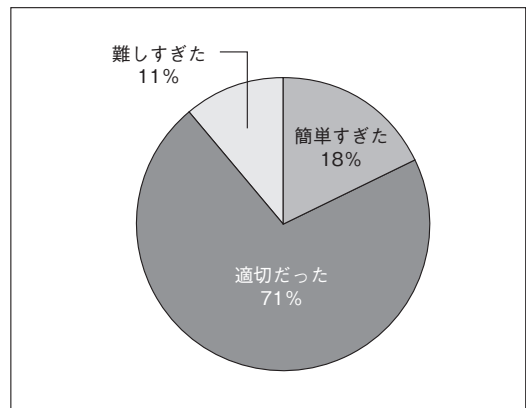
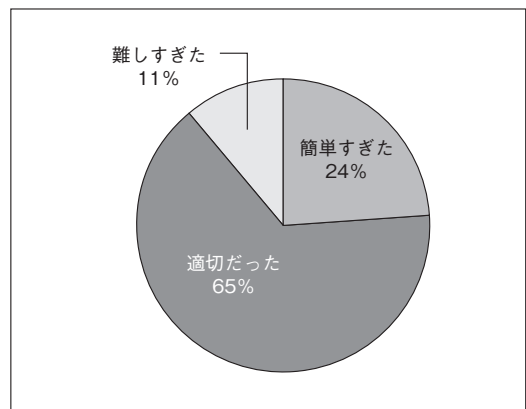


表9 英語A（2014）



との回答をした学生の割合が昨年度よりも6%減少し、適切であると回答した学生の割合が7%増加し、2012年度とあまり変わらない結果となった。ただし、昨年度と同様に、この設問に関しては、回答率が低く（約79%）、実態を十分に反映していない可能性も否定できない結果となってしまった。これについて、昨年度は原因がつかめず、そのため今年度に向けて特段の対策を講じることができないでいたが、今年度アンケートの回収後、集計の過程で、担当の教員が担当する以外の科目の質問については回答の必要がないという誤解を学生たちがしているようであることが判明した。回収を依頼したのは英語A担当の教員が多く、そのために、英語Bの項目については回答の必要がないと判断したということである。このことを踏まえて、今後同様のアンケートを実施する際に、注意を喚起するよう配慮していきたい。

英語Cは薬学部の2年生対象の科目である。そして、2012年度までは4技能を向上させるための教科書が使用されていたが、2013年度からはリーディングとライティングの技能を中心とした教科書を選択し、リスニングとスピーキングの技能については、教室の内外で有機的に運用させることを意図している。2012年度と2013年度の結果の比較では、難しすぎたという印象を持つ学生が6%から16%と大きく増加する一方で、簡単すぎたとの印象を持った学生の割合もわずかながら増加しており、総合的には適切であるとする割合が約13%減少するという結果となった（表13-14）。そして2014年度は、前年度大きく増加した難しすぎるとする学生の割合が0%となり、簡単すぎるとする割合も7%減少し、適切であるとする割合が増加している（表15）。2012年度から2013年度への変化は教科書の変更によるものが大きいと

表10 英語B（2012）

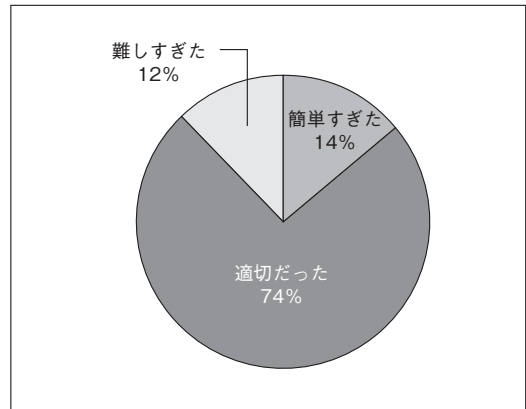


表11 英語B（2013）

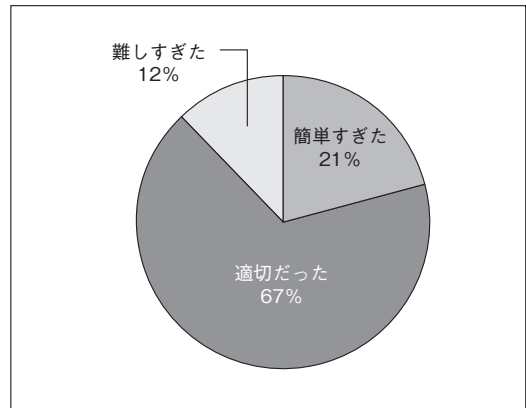


表12 英語B（2014）

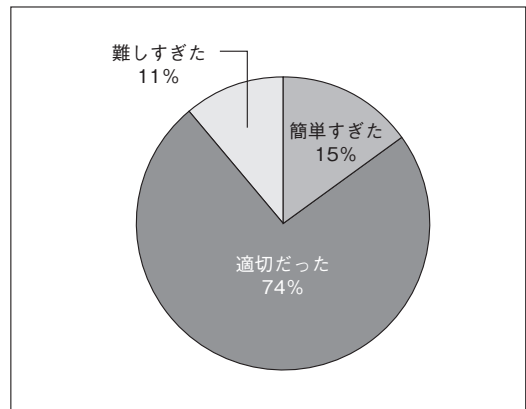


表 13 英語 C (2012)

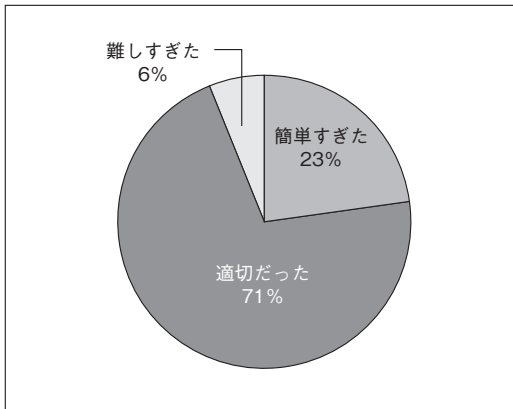
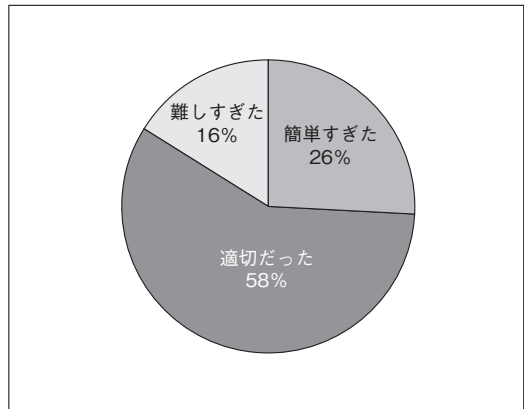
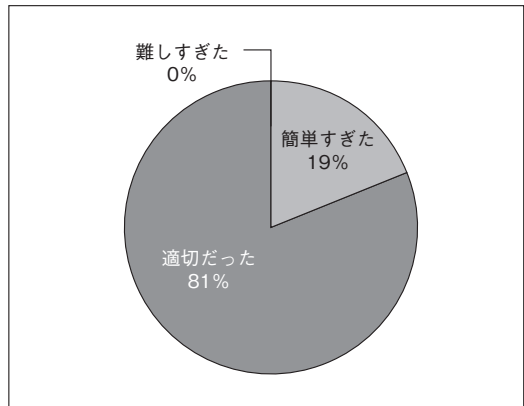


表 14 英語 C (2013)



考えられるが、2013 年度から 2014 年度への変化は、同じ教科書を使用している状況を踏まえると、好ましいものであると解釈することも可能ではあるが、何が原因なのか今後とも注視していく必要がある。

表 15 英語 C (2014)



#### (4) 英語 A についての意見

英語 A は 2012 年度までは 4 技能を向上させることを目的としていたが、2013 年度よりリーディングおよびライティングの技能に焦点を絞り、一般学術言語技能向上を目的とした方向性の教科書を使用しているため、

2013 年度以降の集計ではリーディングおよびライティングの項目のみを集計している。質問内容は「この授業はリスニング(スピーキング、リーディング、ライティング)能力向上に役立った。」という文に対し、「A 非常にそう思う B そう思う C あまりそう思わない D 全くそう思わない」の 4 択で回答するものである(表 16~18)。2012 年度の結果では、リスニング、スピーキングと比べて、リーディング、ライティングの能力向上に役立ったとする肯定的な回答の割合が高い特徴を示した。2013 年度は、リーディングに関しては肯定的な回答が 58% となり、前年の 55.9% と比べるとわずかながら上昇し、2014 年度では 61.7% とさらに上昇している。そして強く否定する割合に関しては、2012 年度から 2013 年度にかけて約 4% 上昇したものの、2014 年度においては、5.7% とこれまでで最も低い数値を示している。ライティングに関しては、肯定的な回答が 2012 年度において、53.3% であったのに対し、2013 年度は 50.9% とわずかながら減少したが、2014 年度では 58.9% となり、3 年間で最も高い数値となっている。強く否定する割合については、2012 年度から 2013 年度にかけて、約 4% 上昇していて、リーディングと同様の傾向を示していたと言えるが、2014 年度には 5.7% となり、リーディングと同様これまでで最も

低い割合となっている。

表 16 英語 A (2012)

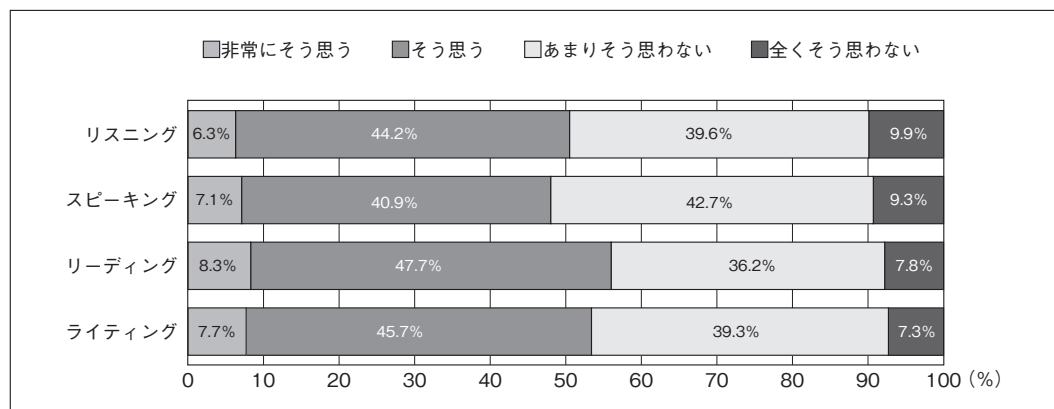


表 17 英語 A (2013)

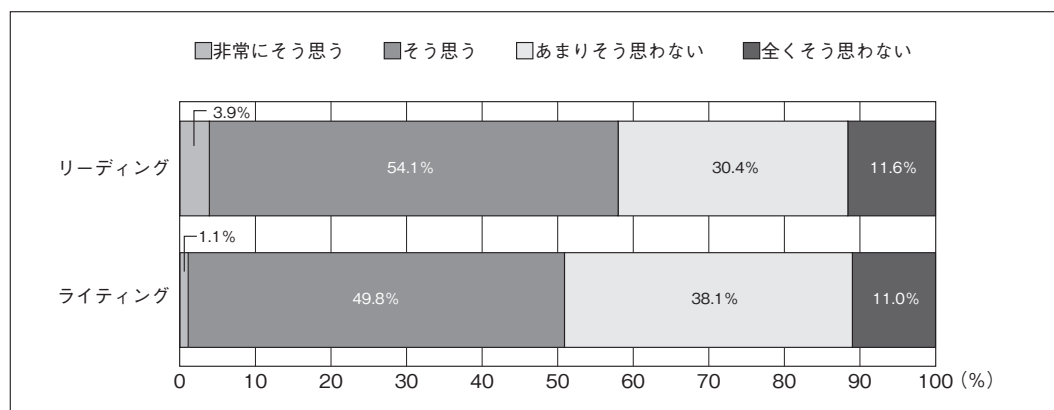
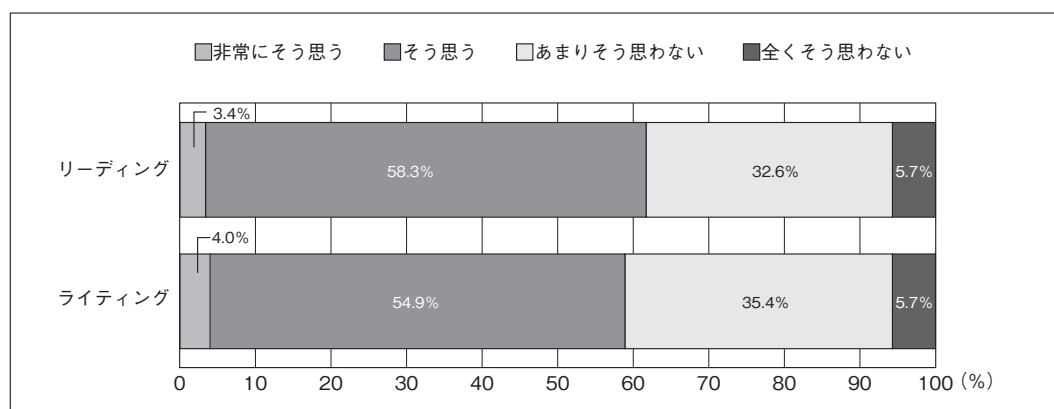


表 18 英語 A (2014)





## (5) 英語 B についての意見

英語 B に関する質問は「この授業はリスニング（スピーキング）能力向上に役立った。」との問いである。この質問に対しての肯定的な回答状況を年度別に比較すると、リスニングについては、2012 年度が 69.2%、2013 年度は 62.5%、そして 2014 年度が 75.4%となっており、2013 年度には減少したものの、2014 年度は上昇しこれまで、最も高い割合となっている（表 19～21）。強く否定する割合に関しては、6.5%、7.9%、3.1%と変動しており、2014 年度が割合として最も低いという点に関しては英語 A の状況と類似している。スピーキングについては、2012 年度の 62.4%に対し、2013 年度は 59.1%となり、2014 年度には 71.5%となっている。強く否定する割合に関しては、8.5%、7.9%、3.9%と年度ごとに減少する傾向を示している。2014 年度の結果そのものについては、これまでで肯定する割合が最も高く、否定する割合ももっとも低いことから、好ましい結果であると解釈することも可能であるが、前述のように、教科書に関する質問と同様、回答が非常に限定されていたこともあって、データの解釈が難しい部分があり、今後回答率を向上させるための対策が望まれる。

表 19 英語 B（2012）

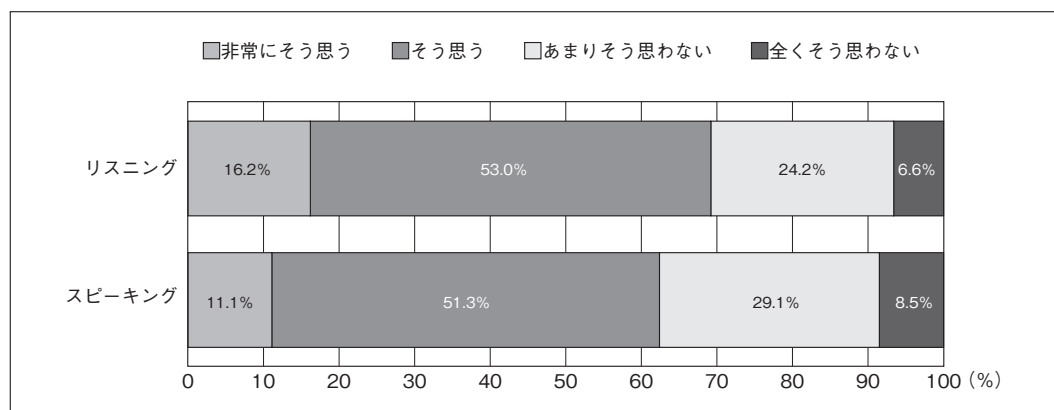


表 20 英語 B（2013）

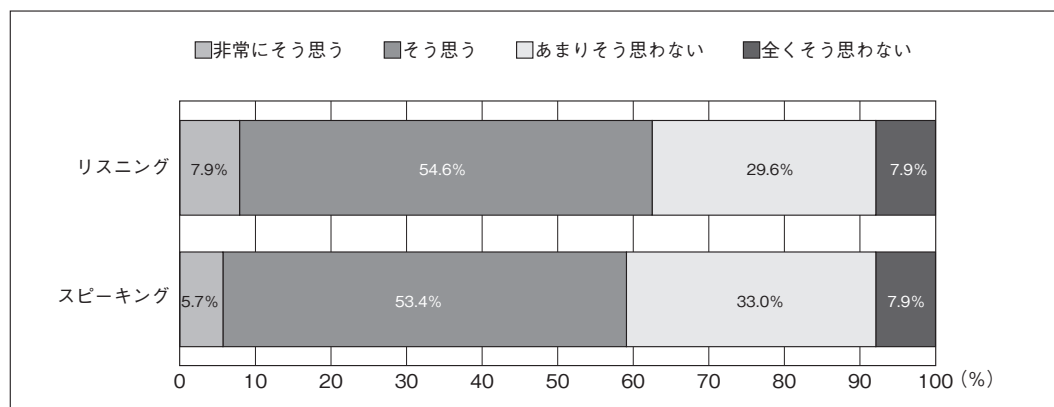
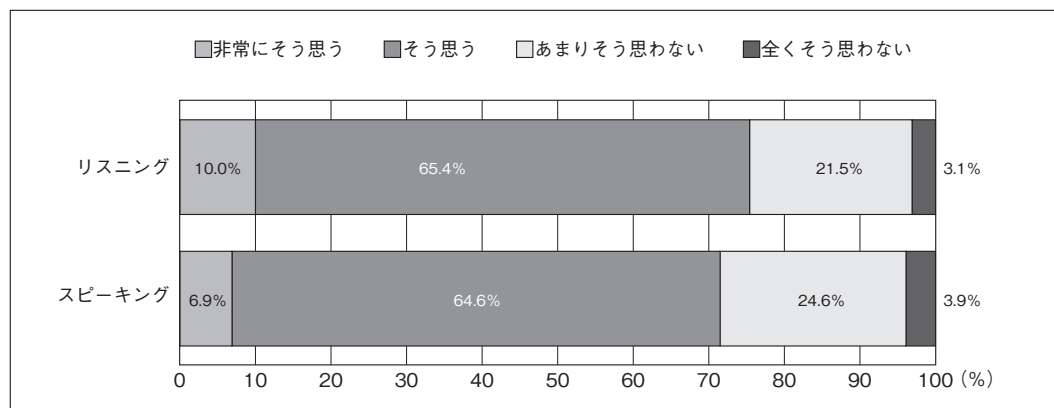


表 21 英語 B (2014)



#### (6) 英語 C についての意見

英語 C については、英語 A 同様 2013 年度よりリーディングとライティングに焦点を当てた教科書を選択したため、2013 年度以降集計する技能についてはリーディングとライティングに限定している。リーディングの技能に関する肯定的な回答は、2012 年度が 56.8%、2013 年度は 62.9%、そして 2014 年度は 53.5% となり、これまでで最も低い割合にとどまっている（表 22~23）。さらに、2014 年度については、強く肯定する割合が 0% に減少している。強く否定する割合に関しては、年度ごとに、2.7%、9.2%、2.3% という推移をしており、2012 年度に近い水準ではあるものの、2014 年度はこれまでで最も低い割合を示している。ライティングについては、肯定的な回答が 2012 年度の 55.6% に対して、2013 年度の 48.8%、そして 2014 年度の 48.8% となるが、この 2014 年度の 48.8% という数字は強く肯定する割合が 0% のものであり、リーディングと同様の傾向を示している。強く否定する回答の割合については、2.7%、11.7%、2.4% と年度ごとに変化しており、リーディングと同様の傾向を示していると考えられるだろう。

表 22 英語 C (2012)

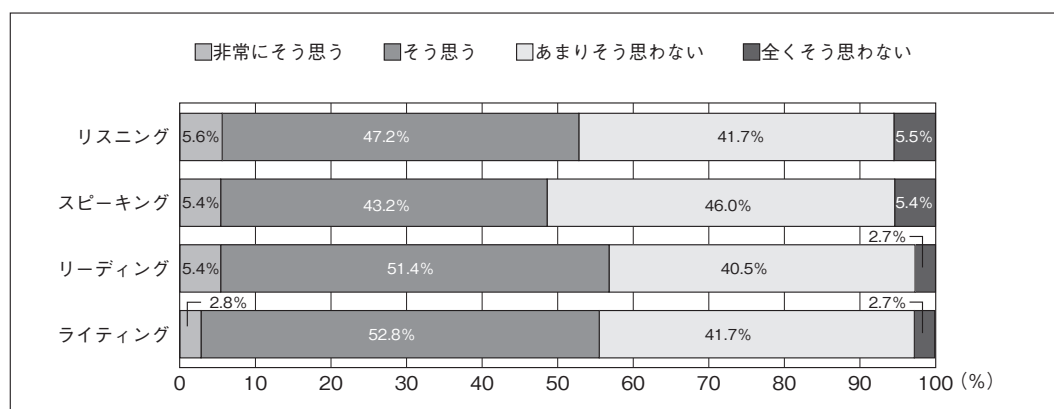


表 23 英語C（2013）

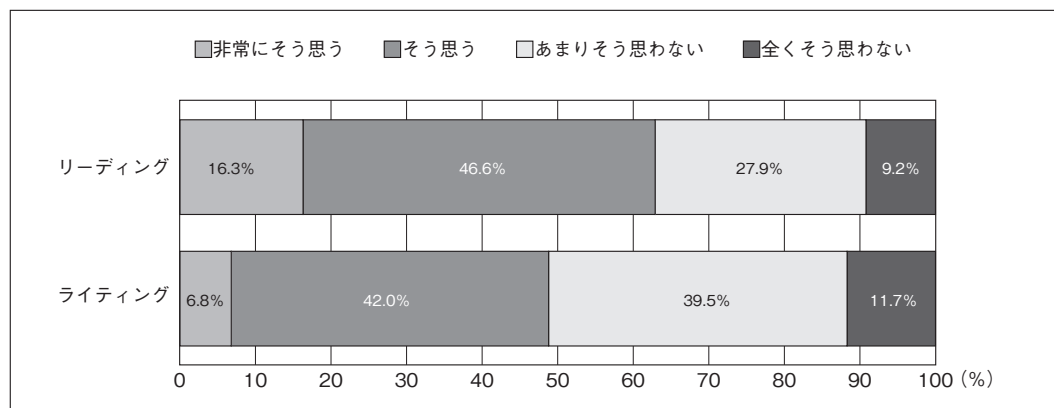
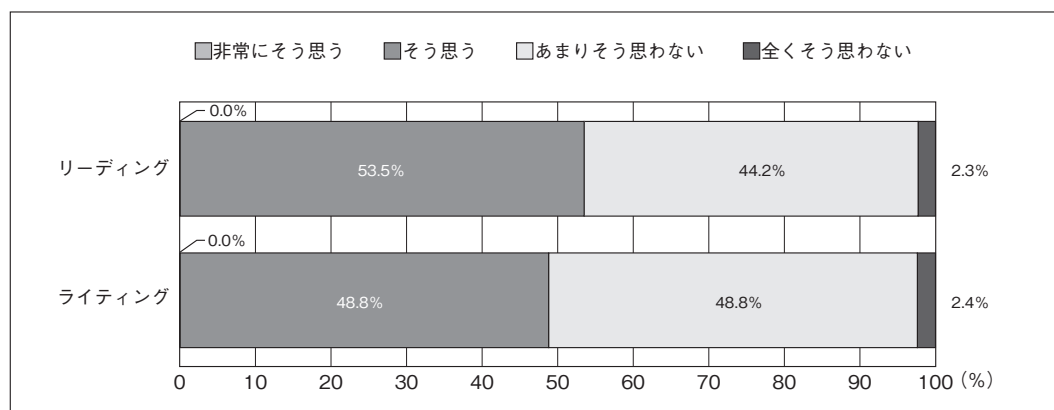


表 24 英語C（2014）



#### Ⅳ. 考察

本稿においては、いわき明星大学の全学共通科目の英語科目を受講する学生に対してのアンケート調査の3年間の結果を分析した。

英語学習および各技能についての認識に関しては、多少の変動はあるものの、3年間を通して大部分の学生が高い必要性を認識している結果が明らかとなった。特に、話すことおよび聞くことの重要性への高い認識に大きな変化はなく、社会情勢を反映している可能性もあるであろうが、英語を通じてコミュニケーションを取ることの重要性を学生が広く認識していることを証明している。そのような学生層が本学の英語プログラムを受講した満足度を見ると、アンケートを取り始めた2012年度と比べれば、全体的な満足度はやや向上しているものの、個々の技能が向上しているかどうかという質問に対しては、十分とは言い難い結果が示され、特にリスニング、スピーキングについては年度を追うごとに低下傾向が見られる。ただし、授業を受けた結果運用能力が向上した否かという質問に対しては、「英語Bについての意見」の部分でも述べたように、むしろ年度ごとに向上する割合が増加している傾向も見られるため、どのようなことが原因でこのよ

うな矛盾とも解釈できる結果が生じているのか今後検証していく必要がある。当然のことながら、年度ごとに入学してくる学生の実態は異なる。この状況に対応する試みとして習熟度別の授業展開を行っているが、昨年度のアンケート調査の分析(菊池 2014)において言及したように、より精度の高い学生の実態分析の方法として、1学年の年度末に、客観的な英語力を測定するために1年次の最初に行うものと同様の一斉にテストを行うことも考えられ、現在その実施に向けて条件を整えている。本学においては、学科改変が次年度より進行し、それにより、全学科において、2年次の英語が必修科目になることもあり、1年次から2年次にかけての学生の実態把握はますます重要度が高まるため、必要な措置であると考えている。

本学における英語を取り巻く学習環境については、3年間を通して十分とはいえないと解釈できる結果が示されており、とりわけ今年度は最も低い数値が示された。図書館における多読用の図書は毎年少しずつ蔵書を増やしているが、それらの認知度を高めることに加え、施設および資料の充実等、今後とも時代に対応して様々な対策を検討する必要性があることを示している結果であると言える。

科目別の意見として、特に教科書に関して、難易度の点では、習熟度によって学生の意見に相当なバラつきが見られることは今年度も同様であったが、前述のように、英語Aに関してはすべての習熟度別クラスの教科書のレベルを現在より1段階上げることとした。英語Bに関しては、特に2013年度の調査では検討を要すると思われる結果が示されたが、今年度に関しては2012年度に示された数字に近い結果となったことから、現時点では教科書は変えずに対応し、次年度以降も動向を注視していきたい。英語Cに関しては、簡単すぎたとの割合が少なくなく、その一方で、難しすぎたとの回答が今年度は見られなかったことから、次年度以降、教科書のレベルの検討をすべきではないかと考えている。もちろん、このような教科書の難易度を検討する際に、どの教科においても難しすぎると考える学生層の存在も無視してはならず、この問題に対しては、教科書のレベルそのものの検討に加えて、習熟度別クラスの編成の仕方にさらなる配慮を加えるなどして、対応していかなければならないであろう。

## V. おわりに

本研究では、いわき明星大学全学共通科目の英語科目に対しての学生の意見の2012年度から3年間の総括を行うことを意図し、一般学術目的への英語教育の方向性の転換およびそれに伴う教科書の変更がどのような形で学生の意識に影響を与えたかを考察した。入学してくる学生は今後とも多様化することが想像されるが、この3年間で大きな変化が見られなかったことの一つとして英語の必要性の高い認識を挙げることができ、大学としてそのニーズに応えていく必要がある。3年間の結果を踏まえると、プログラム全体としては必ずしも好ましいデータのみが提供されたわけではなかったが、このアンケートを行ったことにより、改善を行うことに結びついている事柄もあることを踏まえ、学科改変が進行中の本学において、今後ともこのようなアンケートを継続的に実施し、プログラムの改革のための参考とするデータとして、有効に活用していきたい。

最後に、本研究のために、今年度もこれまでと同様に快くご協力をいただいたすべての本学全学共通英語科目ご担当の先生方に対し、心から厚く感謝を申し上げたい。

## VI. 参考資料

アンケート用紙原本

### 全学共通科目英語学生アンケート (2014)

いわき明星大学では、全学共通科目として、習熟度別に統一教材を用いて英語教育を行っていますが、今回、学生の声を反映させた、より質の高い大学英語教育を提供するため、アンケートを実施いたしますので、ご協力をお願いします。アンケートの結果は、今後のプログラム改善のために活用されます。このアンケートは無記名回答です。特に指示がある場合を除いて、選択肢に○をつけて回答してください。

#### あなた自身について

1. 学科

A 心理      B 現代社会      C 表現文化      D 科学技術      E 薬学

2. 学年

A 1年                      B 2年                      C 3年

3. 大学時代に英語の実践的な力をつけることは、自分の将来の目標実現（留学・研究・就職・大学院進学など）にとって大切だ。

A 非常にそう思う   B そう思う   C あまりそう思わない   D 全くそう思わない

4. リスニング能力育成は英語学習の中で重要な要素だと思う。

A 非常にそう思う   B そう思う   C あまりそう思わない   D 全くそう思わない

5. スピーキング能力育成は英語学習の中で重要な要素だと思う。

A 非常にそう思う   B そう思う   C あまりそう思わない   D 全くそう思わない

6. リーディング能力育成は英語学習の中で重要な要素だと思う。

A 非常にそう思う   B そう思う   C あまりそう思わない   D 全くそう思わない

7. ライティング能力育成は英語学習の中で重要な要素だと思う。

A 非常にそう思う   B そう思う   C あまりそう思わない   D 全くそう思わない

8. これまで受けた全学共通の英語科目の授業について総合的に満足している。

A 非常にそう思う   B そう思う   C あまりそう思わない   D 全くそう思わない

9. いわき明星大学の英語学習環境は充実している（授業、図書館の自主学習教材など）。

A 非常にそう思う   B そう思う   C あまりそう思わない   D 全くそう思わない

10. 大学に入学する前に比べ、リスニング能力が向上したように感じる。

A 非常にそう思う   B そう思う   C あまりそう思わない   D 全くそう思わない

11. 大学に入学する前に比べ、スピーキング能力が向上したように感じる。

A 非常にそう思う   B そう思う   C あまりそう思わない   D 全くそう思わない

12. 大学に入学する前に比べ、リーディング能力が向上したように感じる。

A 非常にそう思う   B そう思う   C あまりそう思わない   D 全くそう思わない

13. 大学に入学する前に比べ、ライティング能力が向上したように感じる。

A 非常にそう思う B そう思う C あまりそう思わない D 全くそう思わない

#### 1年次科目について

##### 英語 A (全学科)

14. この授業の教科書のレベルは

A 簡単すぎた B 適切だった C 難しすぎた

15. この授業はリスニング能力向上に役立った。

A 非常にそう思う B そう思う C あまりそう思わない D 全くそう思わない

16. この授業はスピーキング能力向上に役立った。

A 非常にそう思う B そう思う C あまりそう思わない D 全くそう思わない

17. この授業はリーディング能力向上に役立った。

A 非常にそう思う B そう思う C あまりそう思わない D 全くそう思わない

18. この授業はライティング能力向上に役立った。

A 非常にそう思う B そう思う C あまりそう思わない D 全くそう思わない

##### 英語 B (科学技術を除く)

19. この授業の教科書のレベルは

A 簡単すぎた B 適切だった C 難しすぎた

20. この授業はリスニング能力向上に役立った。

A 非常にそう思う B そう思う C あまりそう思わない D 全くそう思わない

21. この授業はスピーキング能力向上に役立った。

A 非常にそう思う B そう思う C あまりそう思わない D 全くそう思わない

#### 2年次科目について (薬学科のみ)

##### 英語 C

22. この授業の教科書のレベルは

A 簡単すぎた B 適切だった C 難しすぎた

23. この授業はリスニング能力向上に役立った。

A 非常にそう思う B そう思う C あまりそう思わない D 全くそう思わない

24. この授業はスピーキング能力向上に役立った。

A 非常にそう思う B そう思う C あまりそう思わない D 全くそう思わない

25. この授業はリーディング能力向上に役立った。

A 非常にそう思う B そう思う C あまりそう思わない D 全くそう思わない

26. この授業はライティング能力向上に役立った。

A 非常にそう思う B そう思う C あまりそう思わない D 全くそう思わない

### 自由記述

全学共通科目の英語科目の授業やいわき明星大学の英語学習環境の良いところと改善が必要なところは何ですか。以下の余白に具体的に記入してください。

### 参考文献

- 菊池 武 (2013). 「全学共通英語科目に対しての学生の意識調査」 いわき明星大学大学院人文学研究科紀要第 11 号、8-17
- 菊池 武 (2014). 「全学英語プログラムへの学生の意識の変化」 いわき明星大学大学院人文学研究科紀要第 12 号、15-27
- 獨協大学外国語教育研究所編 (2007). 「獨協大学外国語教育に関するアンケート調査報告書」獨協大学外国語教育研究所
- 永井典子他 (2003). 「教養英語教育改革 21 世紀の大学英語教育を目指して」茨城大学大学教育研究開発センター 教養英語教育改革小委員会

(きくち たけし／英語教育)